

川越大意

抑當所は國の中央にして入間郡山田庄三芳野の里川越といへり。東都武陽城を遠ならずして山海程よく隔り土地高く海路遙ふれば洪水浪波の愁もなく東北西の三方は田面にして沼川の用水其自由あしならず。南は平陸原頭に於て松柏叢々たり。城下の所屋は堅横に軒をふらぐ繁華最上の當地あり。情神代警宮の神太刀と琴とを以て女神男神相供に川を渡りたる由緒有により所の名とす。又天神縁起に有

最明寺殿人國の記に當國の風俗は活達にし
て氣ひろしと云へり 按に當所は西に山深く
東に江海を受廣大の地也 上古武藏野とて廣
原相續て自人の心も活氣也 今武陽の大城有
て諸國都會の地ふれば庶民皆善に習ひ又奢美
の風益長せり 秩父山中のときは木質の古
俗也熊谷鴻巣の邊は上州の風に習ひ寒暑中正
の内餘寒猶多し 世説に云入間やふと云事有
嬉敷を悲しきといふあつきをさむきと表
うらにいひなしたるごと木質の古俗と有はか

よふの事ならん 今は古實しりたる人もな
宗祇抄に云入間の里は小川と云所にあるよ
し

入間川と云は入間郡に有る川也 其水源は秩
父山中より流れ出来荒川とひとつふが此とな
り漆草川に落つ川の西は高麗郡なり
之芳野の里は大和丹波武藏に同名有
名所記に田能武の里多能武の沢皆武藏に有
夫木 今ふんと秋をたのむの里人よ

待かひあれや初雁の聲 後平

新古今

志るふよたのむの海に立雁も

稲妻ふの風の秋の夕暮はつ 撰政

やうり共とたのむの雁も頼にて

入尚の里にけふそ入ぬる 俊成

堯惠法師武藏國にて文永十九年正月五日立春
に

春はいま立ともいは 武蔵野や

霞心ちきこ茅の里

其外伊勢物語に我方に寄るとなくなる云茅野
のたのむのかりなと、よめるも此所なりや

當所の詞つかい

物の多きを急らひと云

すくなきをすけないと云

での有をむせいと云

でのなきをあつけないと云

わかいと云をいいと云

おちたをおてたと云

濁音の類限なし 依之其一二をいりて余は

省略其詞俗言にして俗語にあらざ 片言に似

て髣髴たり當時繁花に習ひ城下町方の詞には

稀ふれ共今以て在家は此ことし 凡當所の土
地にては万木干草生ぜずといふことなく米は
尾州に類し麴類殊に勝れたり 中には素麴を
以て上品とす 熟瓜名産の地也是より南三里
か程武蔵野の辺に作れり 中には赤坂松原辺
の瓜はわけて甘味にして城下東都志も出す年
々素麴熟瓜は献饗斗有 其外菓物野苺四季共
に不足なき所也 覽カ

南は仙波新田杉並入口より北五ヶ村杵山海
道出口迄廿五町余

東は清水御門の辺より西御茶屋下三股の辺
迄十五丁余

西丸馬出しより高沢町木戸際迄三丁三十九
間四尺

下町木戸際より下松郷境まで十町廿間余

城築の記

東鑑に云頼朝公時代河越太郎重頼同次郎重房
の領地にして中綱の人皇百三代後花園院御宇
寶徳二年の比より川越の城としてわつか斗の
きあけの地有應仁文明の比扇谷定正の老臣太

合 伊豆守信輝 同輝個嫡 延寶二年より元禄甲戌年徳州古河^替在城

合 養濃守吉保 領十方石 元禄七甲戌年始テ城主トナリ四万石ニテ入部其後數度加恩土石増額寶永年高十五万石ヲ

秋元但馬守春知 領六方石 寶永二乙酉年五方石ニ成テ入部正徳元年二万石加恩高六万石在城十年旧領甲州各村

合 喬房 同喬房嫡 正徳四甲午年より元文三戊午年在城廿四年

合 越後守喬求 同喬房嫡 元文三戊午年より寛保元年酉年迄在城四年

合 但馬守涼朝 合 寛保元年酉年より領之

古戦の記

文明十戊戌年江戸の城を太田道灌築代主太田源六郎康資同十八年城を捨て出奔定正の命にて曾我豊後守之其後曾我兵庫助代主將扇谷定

正大庭居城

明應二丑年十月五日定正大庭の城にて卒 嫡

朝良継之金沢松山江戸川越の城主

永正元甲子年九月廿七日山内定憲と扇谷朝良

武州立河原にて合戦朝良敗して川越の城に入

る 同十月三日顯定父子朝良を襲て川越の城

を圍む

同二年江戸代主曾我兵庫助是を扱ひ両家和平

大永四申年正月十三日北条氏綱一万五千の兵

卒にて品川高輪原出張 扇谷朝興朝良甥八千

の兵を以て防戦 朝興負て江戸の城に入 氏
綱襲て責る朝興は逃て川越の城に入 比時毛呂
太功岡將監北条方に降る氏綱遠山四郎左工門
直景を以て江戸の城を守

享祿三寅年六月十二日朝興難波田彈正上田藏
人を以て府中にて氏康と戦朝興負て川越に逃
兵卒五百
し 帰る

天文六酉年四月廿日朝興川越に於て卒 嫡五
郎朝定健之十三歳川越松山の城主 同七月十
一日氏綱七千の兵卒にて川越を圍上杉左近将

成曾我丹波等二千余にて防戦上杉方負て朝成
虜となる 主將朝定松山の城へ引退く是より
氏綱川越を領して家臣北条左卫門大夫綱成川
越の代主同十八日氏綱松山の城を襲難波田彈
正城を出て北条方山中主膳と戦

同十四己年九月廿六日山内憲政八万余の兵卒
にて川越の城を圍代主左工門太夫三千の卒
にて皆周に是守

同十五年四月廿日の夜北条氏康八千の兵卒に
て上杉八万を切崩す 副将扇谷朝定討死 難

波田彈正燈明寺に古井に落ちて死す 同錫卓
平人小野因幡以下管領討死方一万余大永四年の
り戦始て十三度に及び上杉方終に打負たり世
に是を川越夜軍と云

永祿四年氏康不知とて川越の庄總代卿を
小倉内務助にあとふ 去冬より藤原の功に寄
ると云

同五年三月四日氏康松山の城を素夜 是より
武内一内北城の幕下となり

御高札の場

本町四辺の所世俗札と云 高沢橋詰 下川

橋詰 下杉江末

五丁町の場

上五丁町斗 毎月九番
順廻り二六九

上松郷町一年兩度 五月四日十月廿四日

七塚稻荷社の地

行傳寺境内 東明寺境内 太陽寺氏屋敷

内 高沢所未的場 村岡金藏跡 屋敷内

村岡弥五兵工屋敷内 本町榎本弥惣左

工門屋敷内

十丁町の場

本町江戸町高沢町南町北町 是を上五下町と云
鍛冶町 鴨町 上松江町 多賀町 下町 是を下五下町と云
此外は郷分に屬して町並にかゝわらず中古
以来其義亦く委しく末に記す

川越町年寄

加茂下與一左衛門 本町 水村甚左衛門 高沢町

同町各主

本町 河野清左衛門 南町 井上徳右衛門 北町
水村興工門 高沢町 井上権兵衛 江戸町 次原新兵
出 多賀町 石山勘左衛門 鴨町 進藤五左衛門

鍛冶町 星野四郎治 荻町 岩崎甚兵衛 下町 三名
部忠兵衛

町方草分_之者

加茂下與右衛門 次原新兵衛 鈴木弥兵衛 當
時田舎に居住し川越町草分の節各廿八軒先下し給ふ大方絶して
今三人而已残り

草分後古代の者

榎本弥左衛門 本町 河野清左衛門 本町 三野
嶋長右衛門 本町 井上権兵衛 高沢町 水村甚
左衛門 高沢町 渡部善左衛門 高沢町 門谷六
郎左衛門 北町 門坂八兵衛 北町 渡部久右衛

門 江戸所 近藤忠右卫門 略所 藤野勘左工
 門 略所 渡部善左工門 略所 岡崎五郎右
 工門 多賀所 石山勘左工門 多賀所 岩崎甚右
 工止 略所 加藤甚兵工 殿治所 後田助右卫門
 江戸所

年行事

正月元日 屋敷町方年礼 三日 仙波大師祭 月並
わけ 四日 寺社山伏年礼 六日 年越悦 たれども
多し 七日 七種悦 若菜七種は 此比より 万歳大黒舞采
年多天白まう始
 八日 仙波本地堂大盤若 四節 月並 藤原祭 十四

日屋敷町方けつり掛とし越悦蚕玉とて團子を
 木の枝に付て家殊に軒にさす 十五日 小豆粥
 悦蚕室の地神祭日例鎮守米川祭 十六日 燗魔
 祭 御花町 仙波東照宮御霊屋祭 十七日 御霊屋御忌日
 十八日 月並大師祭 廿日 所在惠比須講悦
 廿四日 仙波愛宕祭 廿五日 日吉 城内天神祭
 二月二日 所在男女出かわり 初午 諸所福船祭
 八日 事始屋敷町方在ともにざる目箆を竿の
 先に付て家殊に高く出皮 十五日 涅槃會諸寺
 弥はんの繪かゝる彼岸中諸寺回向たんぎ有

三月二月末より札込に雛市立（雛は敏達天皇より始） 三日上巳悦蓮饒悦 五日屋敷男女出替 十八日石原観音祭

四月朔日更衣 八日灌佛会諸寺新茶印花を門戸にさす此事推古天皇より始る

五月四月末より札込に菖蒲刀人形市立 五日端午悦（幟甲は光仁天皇より始） 柏饒は神代より用

未

六月朔日天皇祭 氷川社地袋所 十四日仙波浅間市 夜中殊上賑ふ 廿四日愛宕祭

七月朔日より盆後追所方の少女五人十人打つ此はり太鼓を持って歌うたひめありあり之を

盆踊と云 七日七夕祭（本朝にては孝謙天皇より此祭始る） 十日石原観音祭 夜中殊に賑ふ 十三日の夜より十五日末

で家殊に燈籠灯新生靈有者は七月中三とせお向之を灯 十五日中元此日は寺々施餓鬼有（朝

生靈祭は聖武天皇より始中元は燈籠灯も後堀河院より始 十六日燔魔祭 正月と全

八月朔日八朔悦（たのむの悦は後深草院より始） 十五日名月比日組町八幡祭 彼岸中春のや

九月九日重陽悦 十三日後の月十五日氷川祭